

## 古事記に見られる植物

日本最初の薬物の記載が『古事記』にあることは知っていたが、たまたま放送大学で日本民族が開発した和薬の話しをすることになり、古事記を読み始めました。あの有名な因幡の白兔が大国主命から指示され、あかはだかの体を水で濯ぎ、河辺に生えているガマ（蒲）の花を敷き詰めて転がり癒した話である。注意して観察するとガマ（或いはヒメガマ）は富山では県立中央植物園、内山亭、呉羽山の売薬資料館の裏庭、太閤山の薬勝寺公園、砺波市頼成の森公園などに生えている事がわかった。ただ、炎症を止めたり、傷口の治療に用いるのは古事記に書かれているようにガマの花（雄しべ、漢方では蒲黄と呼ぶ）の部分はなかなか見つからず、殆どが雌しべ（竹輪の様な部分）であった。翌年は5月頃から足しげく通い雄しべの部分をやっと撮影する事ができた。11月ごろになると穂綿ができ風に吹かれて種が飛んで行く（童謡では「ガマの穂綿にくるまれば兔はもとの白兔」と歌うが誤りである）。大国主の命が兄弟によって大やけどを負う場面があるが、キサガイ（赤貝）姫とムクガイ（蛤）姫によって助けられる場面も、古代出雲地方で行われていた火傷の治療法である。古事記、日本書紀には香木をカツラ（桂）と読んでいる。この桂の木は古事記では重要な目印となっている。桂の葉を揉んでも、枝を削っても、燃やしても何の特別な香がなく、香木であることに疑問を持っていたが、今年、台風が富山を直進したおり、桂の葉が一斉に落ち黄色い絨毯のようになっていた場所を歩いた時、得も言えぬ甘い香がしたが、まさにこの香が古代人の感じた桂の香りであろうと合点した。この芳香成分は既に近畿大学の高石清和教授がマルトールと言う物質であることを突き止めている。この化合物は糖の発酵産物で、地面に落ちて葉の中の糖分が発酵してできたものである。したがってカツラの葉をいくら揉んでも何も臭わなかった理由がわかった。東北地方ではカツラの葉を抹香として家庭で作っているようである。豊栄画稲荷の「古事記を読む会」で古事記に見られる桂を紹介したら、富山県の今山田にある天然記念物の「大カツラ」を紹介され、さっそく訪れた。樹齢700年とも言われる巨木に圧倒されてしまった。まさに神の宿る大木であった。この木なら高天原からも見届けられ、地上へ降りる目安になるであろうことも納得した。かつて大学時代にヒカゲノカズラの成分研究に携わった事もあるが、このツル状の植物こそ天の岩屋の前でアメノウズメがたすき掛けにしていた植物であったことを知り神代と現し世が結びつき思わず微笑んでしまった。（富山大学 名誉教授 服部征雄）